

金国璞北京語会話教科書における副詞の使用
—《儿女英雄传》との比較

The Usage of Adverb

of Jin Guopu's Beijing Dialect Textbooks : Comparing with *Ernüyingxióngzhuàn*

楊璇

YANG Xuan

要旨

本論文考察明治時期来日執教の漢語教師金国璞所編10種北京話会話教科書中副詞の使用状況、并与出版時代相近、同样用北京話编写的中国清末白話文武侠小说《儿女英雄传》中的副詞进行比较。本論文充分結合太田辰夫《北京語歴史文法》及周一民《北京口語法》(詞法卷)等先賢學說和《儿女英雄传》的相關學術研究成果、并基於兩個語料中副詞的使用頻率、分析整理两个語料中副詞的使用差异、对于清末北京話口語中副詞使用的共時研究和歷時研究均有一定的价值和意义。

キーワード：会話教科書、《儿女英雄传》、副詞、比較対照

目次

1. 金氏の会話教科書における副詞の使用状況
2. 《儿女英雄传》との副詞比較分析
 - 2.1 単音節程度副詞
 - 2.2 否定副詞「沒、沒有」と「不要、別」
 - 2.3 語気副詞「敢」組と「管」組
 - 2.4 範圍副詞「竟」と「淨」
 - 2.5 情態副詞「白」
3. まとめ

1. 金氏の会話教科書における副詞の使用状況

金国璞、字卓菴、北京出身、生没年不詳。明治30年(1897)に開校した高等商業学校附属東京外国語学校(現東京外国語大学の前身)の講師として、日本文部省により招聘され、日本で6年間勤務した。明治36年(1903)に同校講師を辞して帰国した。金国璞は生涯数多くの北京語教科書を出版し、

教科書の形式は応用教科書と会話教科書に2分類できる。会話教科書は10冊に上り様々な場面において使える日常会話を中心に編纂された。¹

本稿は金氏の会話教科書を中心に、中で用いた副詞を取り上げ、先行研究を踏まえ使用状況と特徴を考察する。さらに、その用法と《儿女英雄传》の副詞を比較し、それぞれ使用上の差異を突き止めたいと考える。

中国語の副詞は述語部分を修飾する重要な役割を果たしている。文に付け加えることによって、述語の内容をより一層詳しく伝えられる。黄伯荣、廖旭东《现代汉语》（增订四版）（2007）では「副詞常限制、修饰动词、形容词性词语，表示程度范围时间等意义。」（下冊、第17頁）と指摘している。また、副詞を「①表示程度；②表示范围；③表示时间；④表示处所；⑤表示肯定、否定；⑥表示情态。」（下冊、第17頁）6類に分類している。

太田辰夫《北京語歴史文法》（1958）では副詞を「①接尾辭²；②程度副詞；③時間副詞；④範圍副詞；⑤情態副詞；⑥否定副詞；⑦疑問、感嘆、反詰副詞；⑧指示副詞。」（第6頁～第7頁）8類に分類している。

周一民《北京口語語法》（詞法卷）（1998）では副詞を「①程度副詞；②範圍副詞；③時間副詞；④處所副詞；⑤量度副詞；⑥頻率副詞；⑦語氣副詞；⑧情狀副詞；⑨否定副詞。」（第4頁）9類に分類している。

上述した副詞分類に基づいて、金氏の会話教科書における副詞の使用状況と合わせて、本稿の考察する副詞を8類に分ける。三者の共有分類である程度副詞、範圍副詞、時間副詞、否定副詞、情態副詞と周氏《北京口語語法》（詞法卷）の語氣副詞、場所副詞、頻度副詞となる。

金氏の10冊の会話教科書に使用した副詞を種類別で下に纏め、各副詞の後に用例をカッコ内に示す。

①程度副詞：很（嚴世蕃聽這話很詫異。）；極（況且人又是極賢惠。）；頂（那裏頭的貨物都是頂好的麼）；怪（叫街坊聽見倒怪不好看的。）；太（貝氏說你也太糊塗了。）；更（他更生氣了。）；最（並且他的心腸還最狠。）；深（深知他屋裏的這個底。）；至（我有兩位至好的朋友。）；足（自己疑惑足可以壓倒群賢。）；頗（頗有成效。）；甚（這麼着甚好。）；越（越做越老實了。）；也（我也聽見說。）；非常（酒席是非常的豐盛）；十分（沈煉十分過意不去。）；稍微的（如今不過稍微的盡一點兒心。）；畧微的（畧微的歇一歇兒。）；不大（我有一件事不大明白。）；極其（地方是極其繁華熱鬧。）；格外（承您格外分心，謝謝。）。

②範圍副詞：都（都是什麼貨物。）；總（李勉說我黑下白日總惦记着您納。）；竟（竟等着那個人回來。）；全（這案事沈重兒全在你們倆人身上了。）；單（我怎麼能單放他一個人呢。）；單單（就單單的沒畫腦袋。）；至少（那歲尉至少也得送五百疋罷。）；全都（各樣兒東西全都減一成價出賣）；共總（共總五匹馬飛似的跑了去了。）；通共（通共是三个口岸。）；只可（只可看自己的運氣怎麼樣

¹ 10冊の会話教科書リストは文末の（研究資料）を参照。

² 太田辰夫（1958）（第268頁）は接尾辭について「副詞の接尾辭は多く文語の系統をひくものであるが、古代語には無く、中近世にいたって出来たものが多い。また、古代語にあるものでも、單に文字上の一致にととまり、その用法は異なるものである」と解釈している。

罷。); 通盤 (通盤合計起來。); 一併 (本利一併還清的。); 也都 (也都輸完了。); 一概 (他一概不知道。); 一齊 (就一齊動手。); 一塊兒 (倆為甚麼不跟着我一塊兒到常山去呢。)

③時間副詞: 早 (月亮早就上來了。); 直 (後來李勉直作到中書門下平章事。); 快 (我快告訴王獄長去罷。); 剛 (他剛走到門口兒。); 正 (這天他正坐在那兒盤算。); 老 (怎麼老沒退堂啊。); 先 (我先到館子來了。); 還 (我還聽見說。); 初 (我們是初會。); 一 (只要帳一下來。); 向來 (那向來就是我行我法。); 已經 (支成已經不再鬥兒上打盹兒了。); 正在 (他心裡頭正在胡思亂想七上八下。); 剛纔 (我剛纔解牀底下來的。); 趕緊 (陳顏趕緊進來告訴了房德。); 趕緊的 (所以他趕緊的逃跑出來了。); 隨時 (隨時都可以供的那一層。); 偶然 (即或偶然得着點兒酒肉。); 永遠 (我永遠記着這話就是了。); 再也 (從今以後再也不敢了。); 暫且 (暫且不說。); 立刻 (立刻就起了一身雞皮疙瘩); 起初 (起初都是胆子小。); 早已 (我們早已就惦记上他了。); 早就 (月亮早就上來了。); 原先 (原先同文館是有幾國的語言館呢。); 忽然 (如今忽然遭這個事。); 回頭 (回頭來。); 仍舊 (仍舊回奉天去了。); 一時 (一時不能就回國來。); 漸漸兒的 (漸漸兒的就往小裏抽抽了。)

④否定副詞: 不 (向來不鬧人家的禮物。); 沒 (他向來就沒穿過。); 別 (衆位先別動手。); 不要 (足下不要認錯了人哪。); 何必 (何必大驚小怪的。); 不必 (也不必都得那麼費事。); 不免 (不免要煞費苦心的。)

⑤情態副詞: 白 (就說我看爾白是個爺們了。); 胡 (我就跟他們這麼胡混一場。); 特意 (特意來找他。); 親自 (他親自給鋪好了。); 一同 (一同起身回家去了。); 極力 (倆這麼極力的欺待他。); 連忙 (可就連忙答應說。); 只顧 (只顧在屋裡爲繩定拌嘴。); 不由的 (不由的也動他的心哪。); 照舊的 (就把禮物照舊的那回衙門去了。); 貿然的 (就貿然的動手辦。); 暗中 (把李老恆暗中找了去了。)

⑥語氣副詞: 必 (回頭必打發人來叫爾去。); 決 (決不是推託。); 準 (寫的是今日準演什麼新戲。); 可 (他可不敢害人); 未 (將來可以弄個大事業也未可定。); 倒 (一路上倒沒遇見甚麼鬧天氣。); 豈 (豈敢。); 並 (也並不是他告訴我說你把他告下來的。); 便 (便有許多的害處呢。); 硬 (就有說僂們硬把天泰棧雇的船搶過十幾隻來。); 非 (非到天亮。); 本 (起初他本是由勞績保舉了一個小京官。); 絕 (那是絕聽不進去的); 偏巧 (偏巧那個天又和他作對頭。); 恰巧 (恰巧遇見一個舊日的朋友。); 索性 (如今索性這麼辦罷。); 一定 (我一定重賞你們。); 管保 (還管保叫他們連一個也跑不了。); 果然 (如今果然作了官了。); 實在 (我實在是出於無奈。); 多麼 (那個人有多麼精明。); 只管 (只管騎了去就是了。); 竟管 (您竟管去吧。); 本來 (他本來要發作來着。); 必然 (他必然是知道爾是個強盜頭兒。); 敢情 (抬頭一看敢情是那個義士回來了。); 敢自 (那敢自是十分好了。); 簡直的 (這簡直的是害了僂們了。); 未必 (也未必有一個肯周濟我的。); 莫非 (莫非是一覺睡死了麼。); 大概 (大概還可以多漲出幾兩銀子來哪。); 豈不 (豈不疑惑麼。); 難道 (房德說難道他還是假意麼。); 幸虧 (幸虧這位老爺把他命救了。); 多虧 (也是多虧李勉審出寃情來。); 千萬 (可千萬別說出我當年的事情來。); 竟敢 (倆竟敢私自挪用。); 竟 (如今世上竟會有這樣這樣義膽俠腸的英雄。); 還許 (我想秋後還許往下落罷。); 自然 (我們自然要想法子給你們擇脫的。); 如何 (如何敢做那個夢呢。); 固然 (固然是省得單預備出買貨的銀子。); 可就 (我可就說。); 偏偏兒的

(偏偏兒的望這邊兒一說就碰了。); 總算(也總算是碰了一半兒。); 反倒(反倒弄成大不得意了。); 原本(我原本打算老弟府上辦喜事之前可以趕回來。); 究竟(在我看來,究竟所得者少, 所失者多。); 不免(不免有些個窒礙。); 其實(其實已經有人告訴我說了。); 到底(到底有這件事沒有。); 怕是(怕是五百個駱駝湊不出來。); 務必(務必要把這案賊辦着。); 何苦(何苦叫朋友疑惑我惱我。); 本来(那本来是以貨換貨的意思。); 未免(那未免的太泥古了); 幸虧(幸虧多慎重。); 無故(不能無故的有這個傳言。); 恐怕(一時還恐怕不能就完案。); 居然(居然成了一個繁華市街了。)

⑦場所副詞: 滿處(必然是當做新聞滿處傳說。)

⑧頻度副詞: 再(個等會子再出去罷。); 又(又把主意改了。); 常(他常說。); 還(昨兒個在堂上還撒謊。); 常常兒的(玄宗皇上也常常兒的召見他。); 時不常兒的(他時不常兒的來勒索爾); 總是(總是開大一點的買賣。)

2. 《儿女英雄传》との副詞比較分析

《儿女英雄传》は中国清末期に文康が著した白話文武俠小説, 全40回の構成で、作者の晩年期, 同治帝時代(1862-1874)に成書した。初期は写本で流通していたが, 光緒4年(1878)到北京聚珍堂から木活字本で出版された。金氏の会話教科書について、現在までに確認できた出版物の中で刊行年が最も早い教科書は1898年に平岩道知により出版された《北京官话: 谈论新編》であり、最後は1911年に文求堂から出版された《北京官话: 今古奇观第2編》である。刊行年から見ると、金氏が最後に編纂した会話教科書《北京官话: 今古奇观第2編》(1911)と《儿女英雄传》の差は約33年となる。日中にわたり、今まで《儿女英雄传》に関する語学研究調査は数多く行われ、最も研究されている北京語白話文小説と言っても良い。また、金氏と文氏は共に北京出身で、著作も共に北京語で書かれて、成書時期も近い、《儿女英雄传》は本稿の研究に最もふさわしい1比較対象だと思う。

本稿の比較研究では、金氏の10冊会話教科書の中で北京語特徴が鮮明的、また、《儿女英雄传》との使用差異がある副詞を比較対象とする。用例に関しては、金氏の会話教科書での用例は上述しており、ここでは《儿女英雄传》の用例のみを示す。

2.1 単音節程度副詞

金氏の会話教科書に用いる12個の単音節程度副詞を基準として、《儿女英雄传》で同じく用いる程度副詞を取り上げ、使用頻度を表1に示す。

表1: 金氏の会話教科書と《儿女英雄传》における12個単音節程度副詞の使用頻度³⁾

| | 很 | 太 | 怪 | 最 | 頂 | 更 | 至 | 深 | 極 | 頗 | 甚 | 越 |
|----------|-----|----|----|----|----|-----|---|-----|----|----|----|----|
| 金氏の会話教科書 | 234 | 28 | 5 | 47 | 19 | 39 | 1 | 4 | 18 | 1 | 5 | 23 |
| 《儿女英雄传》 | 72 | 16 | 35 | 70 | 3 | 252 | 0 | 125 | 73 | 13 | 41 | 87 |

³⁾ 本稿における《儿女英雄传》の副詞統計データは趙質群《〈儿女英雄传〉副詞研究》(2011)を参考した。

表1から、12個の単音節程度副詞の中で、金氏の会話教科書で最も使用頻度が高いのは「很」に対して、《儿女英雄传》では「更」の使用が一位であることが分かる。

「很」について太田氏(1975)は「明代では稀に補語として用いる。明代の北京語では状語として用いられたことが『燕山叢録』によって知られるが作品中で普通に使われるようになったのは『紅樓夢』など清代北京語文学からである。」(第2頁)と指摘している。金氏の会話教科書であろうと、《儿女英雄传》であろうと、「很」の使い方は現代漢語とほぼ一致する。

「很」のほかに、両方とも「太」と「怪」の用例が少し見られた。周氏(1998)によると、「太」と「怪」は北京語の常用程度副詞である。⁴「怪」について、太田氏(1958)は「<<怪>>はいうまでもなく<怪しい><怪しむ>意であるが、これが<不思議に><ひどく>の意に転じたものである。おそらく明以後に副詞となったものらしい。」(第270頁)と指摘している。

また、比較を表す際に、金氏の会話教科書と《儿女英雄传》共に「更」と「越」を用いる。用例数では「越」より「更」の方が多い。「最も、一番」という意味を表す際に、両方とも「最」、「頂」、「極」を用いる。周氏(1998)は、「“最、頂”表示程度达到极端，胜过所有其他的。」(第194頁)と指摘している。しかし、「最」より「頂」の用例が少ない。「頂」について、太田氏(1958)は「このような副詞の『頂』はその後、長い間、ほとんど用例をみない。清代の北京語でも普通には使われなかった、後期からみえるようになった。あるいは南方の方言であったものかともおもう。」(第269頁)と指摘している。北京語で「頂」をあまり使用しないことは太田氏が指摘した「南方の方言であったもの」が一つの原因と考えられる。金氏の会話教科書では「極」の使い方が程度副詞と程度補語2種類あり、程度補語の用例が例えば：您說的全是我們北京的口音，清楚極了。//這真是妙極了。などがある。現代北京語では「極」が程度副詞として使うより、程度補語として使うのが一般的である。周氏(1998)は「“极”也表示最高程度，一般用作补语，例如“好极了，厉害极了”，其后总要加“了”。」(第270頁)と指摘している。

《儿女英雄传》に使用する「深」、「至」、「頗」、「甚」はやや文語的、金氏の会話教科書では殆ど使用しない、現代中国語では書き言葉として使用している。「至」は《儿女英雄传》での用例が見当たらない、金氏の会話教科書でも1例しか無い。

金氏の会話教科書では「越」の使い方は全て「越……越……」となり、「越」だけを使用する用例がない。例えば：越說越對勁。//呆了會子越聚人越多。//知縣越說越有氣。などがある。《儿女英雄传》に用いた「越」の使い方では両方ある。例えば：我越想你這話越不錯。(第十六章)//越顯黑白分明的好看。(第二十九章)などがある。

《儿女英雄传》における8つの単音節程度副詞の用例は下に示す。⁵

很：那前任請的朋友錢公，就很妥當。(第二章) 太：這話大約是九兄你嫉惡太嚴。(第二十三章) // 怪：長得怪俊兒的！(第十五章) // 最：當朝聖人最惱的貪官污吏。(第十三章) // 頂：一個生的頂高細長。(第四章) // 更：這主意更高。(第十一章) // 深：深望你這番鄉試一舉成名。(第三章) // 極：原

⁴ 周一民(1998)：191頁。

⁵ 本稿において引用した《儿女英雄传》の用例は、《古本小说集成》に収録された北京聚珍堂木活字本(1878年)を底本にし、句読点は齐鲁书社《儿女英雄传》上下(1989)を参考した。

來一副極豔麗的仕女圖。(第二十九章)//頗: 原來安老爺酒量頗豪。(第十三章)//甚: 況且浙江離淮安甚近。(第三章)//越: 越顯得紅白分明。(第四章)。

2.2 否定副詞「沒、沒有」と「不要、別」

明治時期の北京語教科書でよく使用する否定副詞について、楊杏紅(2014)は「古代漢語の否定副詞如“莫、勿、否”等，除了引述古語的時候之外，在北京官話課本中很少見到。“休”在較早的白話中經常用來表示禁止(太田辰夫，1957)，但在明治時期的官話課本中幾乎沒有用例。“不”、“沒”、“別”是官話課本中常見的否定副詞，其分工也較為明確，基本用法與普通話沒有差異。」(第97頁)と指摘している。

ここでは、金氏の会話教科書と《儿女英雄傳》に用いる「未」の意味を表す「沒、沒有」と禁止を表す「別、不要」を取り上げ考察する。

1) 「沒」と「沒有」

周氏(1998)は「“不”和“沒”都表示否定北京话里几乎不说否定副词“沒有”，一般都说“沒”。」(第210頁)と指摘している。金氏の会話教科書では「未」の意味を表す際に「沒」のみを用い、「沒有」は「無」の意味に用いる。例えば：連一個人也沒有了。などがある。しかし、《儿女英雄傳》では「沒」と「沒有」を両方用いる。

太田氏(1975)は「《紅樓夢》や《品花寶鑑》では、どちらも用いるが《儿女英雄傳》では「沒」に限られ、「沒有」は例外と認むべきである。筆者が検出し得たのは下の2例にとどまる。…那部書竟沒有載這句方言。(第四章)//果然沒有看見。(第三十八章)」(第13頁)と指摘し、また、「なお、【小額】では「沒」のみを用い「沒有」はない。【北京】では「沒」が多く、「沒有」はきわめて稀。「未」の意味に「沒」を用いるのは旗人語ではあるまいか。」(第14頁)と指摘している。

《儿女英雄傳》で「未」の意味に用いた2つの用例を例外と認むべきであることは金氏の会話教科書と《儿女英雄傳》に「沒有」という語彙は「未」の意味を持たないのが判断できる。しかし、現代中国語では「未」の意味を表す際に「沒」と「沒有」を両方用いる。

2) 禁止を表す「不要」と「別」

周氏(1998)により、北京語で禁止を表す際に「甬」と「別」を用いる。⁶金氏の会話教科書では「甬」の用例がなく、「別」が43例、「不要」が12例を用いる。また、《儿女英雄傳》では「甬」の用例もなく、「別」が140例、「不要」が52例となる。両方とも「不要」より「別」の用例数が多い。

「不要」と「別」について、太田氏(1958)は「禁止をあらわす副詞《別》は明代にも若干あるが多く用いられるようになったのは清代である。《不要》の縮約された形であるとも言われるが正しくない。」(第303頁)と指摘している。また、《儿女英雄傳》に用いた「不要」と「別」については、「不要」が普通語で、「別」が口語的に用いる。⁷例えば：真別辜負人家的心。(第七章)//千萬不要誤事。(第四章)などがある。

⁶ 周一民(1998): 第211頁。

⁷ 太田辰夫(1975): 第14頁。

金氏の会話教科書における「別」の使用に関して、大部分は文化水準、身分の低い男性、或いは女性を用いる。また、文化水準、身分の低い男性、或いは女性が「不要」を用いる場合は殆ど目上の人にアドバイスを提供する際に用いる。それ以外も公的な場面で「不要」を用い、「不要」より「別」の方が口語的な特徴があるのと言える。例えば：別辜負了老爺起死回生之德。//別叫他們聚在一塊兒。//老爺千萬不要大聲的說話。//足下不要認錯了人哪。などがある。

金氏の会話教科書における「別」と「不要」は、使用者と使用場面によって使い分けられる、北京語口語での特徴が鮮明な「沒」を使用することから、金氏は生き生きとした北京語の教材を編纂した努力の証明として認識できる。

2.3 語気副詞「敢」組と「管」組

1) 「敢」組語気副詞

金氏の会話教科書と《儿女英雄传》に用いた「敢」組語気副詞は「敢情」、「敢自」、「敢則」、「敢是」の4つとなる。周氏(1998)は「敢情」が現代北京口語に属すると指摘した⁸。

「敢」組語気副詞の中では、金氏の会話教科書に最も使用頻度が高いのは「敢情」である。太田氏(1958)は「北京語では「敢自」ともいう。また《敢情》も同類の語。《原來》の意味のときと、《自然》《當然》の意味のときとある。」(第291頁)と指摘している。金氏の会話教科書では、「敢情」の用例が43例で、「敢自」の用例が1例しか見当たらない。

《儿女英雄传》では「敢則」と「敢是」を用い、それぞれの用例が26例、29例となり、使用頻度がほぼ同じである。例えば：敢則都到了！(第二十三章)//她敢是救我來了。(第六章)などがある。

「敢則」と「敢是」について、太田氏(1975)は「《敢情》《敢則》この2語は同義語で文字はいろいろに書かれる。『儿女英雄傳』では「敢則」が用いられ、また同じ意味で「敢是」ということが多い。『小額』には「敢情」はあるが「敢自」などは無く、『北京』には「敢情」はなく、「敢則」が見える。これは北京語内部の小方言の違いであろうか。」(第10頁)と指摘している。

2) 「管」組語気副詞

金氏の会話教科書と《儿女英雄传》に用いた「管」組語気副詞は「管保」、「保管」、「管取」、「管情」、「管定」の5つとなり、何も必ずという意味を表す。周氏(1998)は「管保」が現代北京口語に属することと指摘した。⁹

太田氏(1975)は「北方では「管保」を用い、南方では「包管」(保管)を用いるが意味は同じ。また動詞のごとにもとれる。この「管」は、古白話の「管」「管取」「管情」「多管」などと同じく、かならずの意。」(第6頁)と指摘している。

金氏の会話教科書では「管保」だけを用い、用例が4例ある。《儿女英雄传》では「管保」、「保管」、「管取」、「管情」、「管定」5つを全部用い、それぞれの用例が37例、3例、7例、1例、1例となる。例えば：二百吊錢管保買不下來。(第四章)//這件事交給姐姐，保管你稱心如意。(第九章)//管取他還摸不著頭腦呢。(第十四章)//管情費了許多的精神命脈。(第十九章)//你管定連門兒也不

⁸ 周一民(1998): 第207頁。周一民は「敢情」を「肯定語気副詞」と「醒悟語気副詞」に分類している。

⁹ 周一民(1998): 第207頁。

准他進。(第十九章)。などがある。「管保」以外の用例がかなり少ないことから、当時、必ずという意味を表す「管」組語気副詞の中では、「管保」の使用が一番安定しているのが分かる。

語気副詞「敢」組と「管」組の比較を通して、《儿女英雄傳》で同じ語義をいくつかの語彙で使用することに対して、金氏の会話教科書では日常で最も使われる語彙を取り入れたことが分かった。また、時代の変遷につれて、現代中国語に保留された語彙もあれば、使用しなくなったものもあり、当時の北京語語彙が現代中国語に与えた影響や時代に伴った語彙変遷事情が認識された。

2.4 範囲副詞「竟」と「淨」

「竟」と「淨」は「只」の意味を表す範囲副詞である。太田氏(1958)は「北京語で「淨」「竟」は同音であるが、同音でない地方では「淨」を用いるようである。「竟」はもと時間副詞でこれが範囲副詞「淨」と混用されるようになったものか。【紅樓夢】などには無く、【儿女英雄傳】が初出かともわれる。【儿女英雄傳】では「竟」は時間的な意味をもち、「常に…ばかり」の意であるらしい。「淨」は“…だけ”で、時間的な意味は無い。」(第5頁)と指摘している。《儿女英雄傳》では「淨」と「竟」が範囲副詞として用いる用例が2つずつある。例えば：淨嫁妝就有十幾萬黃金。(第三十一章) // 這是竟靠媳婦兩個人也弄不成。(第三十三章) などがある。

金氏の会話教科書では「淨」は範囲副詞として使用せず、形容詞として使用し、「乾淨」の意味に用いる。例えば：几榻整齊，器具潔淨。// 路信就叫掌櫃的給他們找一間乾淨房子住。「竟」は範囲副詞と語気副詞として使用し、それぞれの用例数が32例と13例となる。また、範囲副詞として使用する際に、「常に…ばかり」の意に用いる用例と「…だけ」の意に用いる用例両方ある。例えば：「常に…ばかり」の意を表す用例：竟靠著那些個客店也做了不少的買賣。「…だけ」の意を表す用例：河裏竟剩了十幾隻糟朽不堪的船了。がある。

太田氏(1958)はさらに【官話指南】の用例では「竟」と「淨」が範囲副詞として使用する際に時間上の差異がなくなっていることを指摘した。¹⁰⁾

太田氏の指摘から、「竟」と「淨」が範囲副詞として使用される際に中国の白話小説でも、日本の北京語教科書でも、既に混用現象が生じていたと推測できる。しかしながら、金氏が編纂した会話教科書では「竟」を範囲副詞として、「淨」を形容詞として使い分けている。この理由は金氏が会話教科書を編纂する際に、日本人学習者たちに分かりやすく、意識しながら言葉の混用現象を最低限にする為と考えられる。

2.5 情態副詞「白」

情態副詞「白」では金氏の会話教科書に語義が二つある、語義①(賠償を払わないで)ただで。例えば：若是不答應他們，不是白叫他們害了麼。がある。語義②(目的をはたせず、効果をあげられず)無駄に、むなしく。例えば：個白聰明了，連這個事都見不透。がある。この二つの語義では現代中国語にも使用している。

《儿女英雄傳》では上記した語義①と語義②以外に、もう一つ語義がある。下に示した3つの例文に用いた「白」の語義について、語義①と語義②どちらも対応せず、明らかに異なる。

¹⁰⁾ 太田辰夫(1975): 第5頁。

回來你老打尖，就打那廟裏頭過，白瞧瞧，那燒香的人有多少！（第三十八回）//早有那些關切些的親友，得了信遣人前來探聽，也有就白來看看的。（第三回）//妹子你白想想，我們這位二叔在你跟前，心思用的深到甚麼分兒上？（第十九回）

張道生（2003）は、この「白」の語義を「特意、隨意」または「只是、光是」の意味と解釈した。¹¹そのため、金氏の会話教科書に用いた「白」を「白¹」と呼び、用いない語義③の「白」を「白²」と呼ぶ。

「白²」の出どころについて、魏兆惠（2017）は「从文献来源看，特殊副词“白”主要分布于三类北京官话文献中，而在同时期的其他方言作品中未见。第一类：满汉合璧、满兼汉或者北京官话教科书。第二类：清代北京官话小说，如《红楼梦》及续书系列。第三类：北京说唱文艺作品，如子弟书。」（第129頁～第131頁）と指摘している。

また、「白²」の由来について、楊杏紅（2014）は「可在清代方言文献，如《儒林外史》《西游记》《歧路灯》《醒世姻缘传》等都没有“白²”的用例。这些现象都说明“白²”的产生跟清代满语的接触有很大关系。」（第237頁）と指摘している。

今までの学術見解により、「白²」は満州語との関わりが深いと言われている。また、魏兆惠（2017）は「白²」の使用状況について、「从多部北京官话作品的改写版看，“白”因为意义费解多次被删、改。」（第131頁）と指摘した。ここからは、「白²」の使用者と使用範囲に限られ、方言の色彩がかなり濃い言葉だと推測できる。逆に、同じ北京語で書かれた著作でも、《儿女英雄传》の方が金氏の会話教科書より方言の色彩が色濃く残っていると判断できる。金氏が編纂した教科書では、筆者が研究した限り、満州語の痕跡が薄く、おそらく金氏が教科書を編纂する際に「官話」でない言葉を慎重に取り扱っているためと考えられる。

3. まとめ

本稿では、金氏が編纂した10冊の会話教科書を中心に、中で用いた副詞を取り上げ、黄伯榮、廖旭東《現代漢語》、太田氏《北京語歴史文法》、周氏《北京口語法》（詞法卷）の副詞分類に基づいて、8類に分類し、それぞれの用例を挙げた。さらに、分類した副詞の中に北京語特徴が鮮明な副詞と同じく《儿女英雄传》に用いた副詞の比較分析を行い、同じ副詞における使用上の差異とその成因を突き止めた。この比較対照を通じて、《儿女英雄传》より金氏が自分で編纂した会話教科書に日常で最も使われている北京語副詞を取り入れた事実が判明できた。また、時代の変遷に伴い、《儿女英雄传》に用いた一部の副詞は今の北京語から既に消えたことに対して、金氏の会話教科書に用いた副詞は未だに北京語に存在していることが分かった。これは金氏の会話教科が時代を超えて影響力を持ち続けた理由の一つと考えられる。また、金氏の会話教科書と《儿女英雄传》における副詞の使用状況と相違点を考察し、多少結論を示したが、また関連上で未解明な所が多く有り、今後の課題とする。

¹¹ 張道生（2003）：第4頁。

研究資料

- 金国璞/平岩道知 1989 《北京官話：談論新編》 文求堂書店
—— 1901 《士商叢談便覽》上卷 文求堂書店
—— 1902 《士商叢談便覽》下卷 文求堂書店
—— 1903 《華言問答》 文求堂書店
——/諸岡三郎編 1903 《虎頭蛇尾》諸岡三郎
吴启太/鄭永邦著 金国璞改訂 1903 《改訂官話指南》第一卷 文求堂書店
—— 1904 《北京官話：今古奇觀第1編》 文求堂書店
——/鎌田弥助 1907 《摺紳談論新集》 文求堂書店
——/瀨上恕治 1907 《華語分類撮要》 文求堂書店
—— 1911 《北京官話：今古奇觀第2編》 文求堂書店

参考文献

- 太田辰夫 1958 『中国語歴史文法』 江南書店
太田辰夫 1975 「『兒女英雄伝』の副詞」 『神戸外大論叢』 第26卷第3号
周一民 1998 《北京口语语法》（词法卷） 语文出版社
黄伯荣, 廖旭东 2007 《现代汉语》（增订四版） 高等教育出版社
张谊生 2003 《近代汉语情态化副词“白”再议——兼论副词“白”的虚化方式和内部差异及联系》
《乐山师范学院报》 第18卷 第1期
赵质群 2011 〈《儿女英雄传》副词研究〉 宁波大学硕士专业学位论文
杨杏红 2014 《东亚汉语史书系 日本明治时期北京官话课本语法研究》 厦门大学出版社
魏兆惠 2017 《清代北京官话特殊副词“白”来源于满语的若干旁证》《中央民族大学学报》（哲学社会科学版） 2017年第4期第44卷（总第233期）